

ちよこつと総合読本候補作品

上田仮説サークル資料

2023年1月28日

渡辺規夫

過渡期の科学者

湯川秀樹は『ピエール・キュリー伝』の書評で、ピエールを「過渡期の物理学者」と位置づけています。ピエールが死んだのが1906年。物理学の大変革の真っ最中で、ピエールはその後の物理学の革命のことは知らなかったのだから、当然のことながら過渡期の物理学者たらざるを得ないのです。

湯川は過渡期にはいろいろな型の変った学者が輩出するとして、ピエールもその1人だと言っています。湯川は過渡期の物理学者はその後の理論の発展により間違いが明らかになり、その業績が忘れられがちなことに警告を發しています。

ここから類推すると、今は仮説実験授業研究の過渡期だと考えてもいいかも知れません。間違いなく過渡期でしょう。過渡期であればいろいろな型の変った研究者が出てきてもおかしくありません。恐らく板倉さんは仮説実験授業研究会に型の変ったいろいろな研究者が集まることを期待していたと思います。その結果か仮説実験授業研究会には本当にいろいろな型の人があります。これはとてもいいことなのだろうと思います。

過渡期に出てくる多様な考えは、次のステップの捨て石となることによって生かされるかも知れません。どの考えが正しいのかは実験が決めてくれます。

考えてみれば、ノーベル賞を受賞したラザフォードもボーアも、そして湯川秀樹自身の理論もその後の理論の発展の中で正しくないことが明らかになっています。しかし、そのことによりそれらの業績が小さいと考えるはならないのです。

先生なしでは五流にしかできない——ヨゼフ・シュトラウスの音楽家への転身

ヨゼフ・シュトラウスはヨハン・シュトラウスの弟で、ウィーン工科大学を卒業して技師として活躍していました。ヨゼフは趣味で音楽をやっていたものの職業にする気はなかったのです。ところが兄ヨハンが病気になりその代役で指揮者になるように求められ、仕方なしに作曲したのが「最初にして最後のワルツ」これが大好評で、兄ヨハンの病気がなかなか直らないのでその代役を勤めるよう強く求められました。しかし、いくら音楽が好きで、父ヨハンのリハーサルを横で見ていたという環境に育ったと言っても音楽は素人、そこでヨゼフはバイオリン奏法と作曲法と音楽理論(和声楽)の先生について2年間正規の音楽教育を受けて、その免状をもらいました。

ヨゼフは音楽の才能があつたのですが、正規の先生について初めて音楽家として独り立ちできたのです。「人気はヨハン、実力はヨゼフ」と言われたそうです。